

書 評

石觀海著『宮體詩派研究』

胡大雷著『宮體詩研究』

歸 青著『南朝宮體詩研究』

原 田 直 枝

南山大學

この數年、「宮體詩」^註を主な檢討對象とする專著が、中國でたて續けに刊行されている。本書評でとりあげる三書のように、タイトルに「宮體詩」と明示されたものの他にも、劉躍進『玉臺新詠研究』（二〇〇〇年、中華書局）、胡德懷『齊梁文壇與四蕭研究』（一九九七年、南京大學出版社）等、「宮體詩」盛行の時期をめぐる研究成果公表はちよつとした活況を呈している。

ところで、中國文學史上の數多の事象のうちでも、古典時代に附與された評價そのままには今日眺めることの出来

ないものの一つに、この「宮體詩」がある。

——中國文學史の全體から見れば、『玉臺集』に收めるような戀愛詩、特に感覺的あるいは官能的な美におはれるような態度は好ましくないとされた……（略）。

「宮體」の詩風を最もよく傳える文獻である『玉臺新詠』が、成立から千四百年にわたつて、これを専門に扱う研究書に乏しかったことを指摘された小川環樹博士は、同じ文章の中で右のように述べておられる（『玉臺新詠集』について）一九五六年、岩波書店「文庫」、のち『著作集』卷一所收。

鈴木虎雄譯解『玉臺新詠』の刊行に寄せて草せられた一文である。この「好ましくないとされた」という表現には、少なくとも「そのように見られてきたが、本當に『好ましくない』のかどうかは、一概に決めつけられない」という示唆が籠められていよう。ともあれ、二十世紀半ばの當時にしてなお、こうした慎重な表現によつてその本來の價值がほのめかされるほどに、『玉臺新詠』所收の作品及び「宮體」の詩風に沿うような文學には、大變長いこと「好ましくない」という認識がついて回つた時期が續いていた

ことが、この一文からも窺われる。幸い、この頃以降、古典時代の價值觀の制約を受けずに濟むはずの今日の文學史研究の中で、かく傳統的なプラスの評価という後ろ盾を持たない「宮體」詩を、それが本來占めるべき位置に据えて見るための數々の試みは、日本でも中國でもたゆみなく重ねられてきている。

ただ、そうした研究の迹を見わたしてみると、梁代、「宮體」の稱が登場し「宮體」が最も盛んになった時期の作品と場そのものを取りあげ「宮體詩」を俯瞰するような検討が展開されることは意外に少ないことに氣づく。もちろん、これを取り卷く文學史上の事象を取りあげる中で、比較材料或いは參考材料として附隨的に目配りされる例は多い。「宮體」の時代、ちょうど先秦から六朝までの詩文の精華を集めた『文選』編纂直後、六朝文學集大成の時期、劉勰『文心雕龍』、鍾嶸『詩品』など文學理論の後を承けるとあって、文學批評史においては材料豊かな時期である。簡文帝、元帝をはじめとする「宮體」に携わった人々の文學思想の検討、「宮體」の詩風を最もよく伝える文獻であ

る『玉臺新詠』の成立事情に關する考證、さらに、初唐に引き繼がれてゆく韻律の雕琢の資料としての分析等々、「宮體」を取り卷く時代の文學の諸相をめぐる研究は、どれもかなり層も厚く、幅廣く行われている。それらの研究の中でごく頻繁に「宮體」という事象は、參照される。また、庾信や江總をはじめ、六朝後半の詩人や文學作品を扱っていると、その詩人なり作品なりに關連して、「宮體」「宮體詩」に目を向けることは、普通に行われる。ただ一つ、それほど言及される「宮體」の、最も盛んな時期の作品と場を取りあげてその實態を俯瞰する作業というものは、あまり例を見ない。

もとより、「宮體」之名、雖始于梁、然側艷之詞、起源自昔（劉師培『中國中古文學史』）と說かれるように、「宮體詩」研究の對象となる時期をそれほど狭く限定せず、艷詩の流れを指して「宮體詩」とするなど、緩やかな扱い方もある。宋齊期の艷詩を含めた「宮體詩」研究としては、夙に網祐次『中國中世文學研究——南齊永明時代を中心として——』（一九六〇年、新樹社）のような專著もあれば、個

別の論文類を探すのに不自由しないで済む。それでも、永明期から梁、陳へと一續きに論じたものになると、俄然先例は乏しくなる。

唯一と言ってよいだろうか。森野繁夫『六朝詩の研究——「集團の文學」と「個人の文學」——』（一九七六年、第二學習社）では、齊から梁にかけての詩を扱う中で、「宮體」詩についてもその作品を幅廣く検討している。その論述に充てられた頁數も多く、數章を費やして（第二章「齊・梁の文學集團と中心人物」、第三章「集團の文學」第二節「詩の制作に加えられた制約」、同第四節「宮體詩」、第五章「齊・梁の文學觀」、齊梁期の文學思想、社會背景、作り手たちをめぐる考察もし、こと「宮體」の名稱出現以降の宮體詩を作品制作の過程にまでわたってその特性について具體的な検討がなされている。詳細な研究であり、「宮體」の概要はほぼこの一書から窺うだけで足れりとすべきなのかも知れない。ただ、それから三十年餘の間に研究の裾野も擴がり、アプローチの方法も多様になってきている。また、二十世紀半ば以來、單發の論考等を通して多くの研究

者の間で蓄積されてきた中國における「宮體」研究の今を窺う、ということも興味深い。相次いで中國で刊行された「宮體詩」研究の專著は、どのような切り口を示し、「宮體」或いは「宮體詩」の實態をどのようなものとして解き明かしているのか。「宮體詩」を取り巻く時代の詩文を研究する者の一人として、多くの關心をもつて繙讀してみた。

さて、ここにとりあげる三書は、「宮體詩が生じたのは歴史の必然である（宮體詩的產生有着歷史的必然）」とその「導言」劈頭に述べる歸氏の書をはじめ、六朝の後半期に「宮體」と呼ばれる詩のスタイルが徐々に形成され、ごく短い間ではあるが一時代を畫する展開を示した、という事實をまず重視しようという姿勢が、共通して窺われる。「宮體詩」を研究対象としてとりあげるのだから當然と言えば當然なことだが、こうした明快な姿勢は、初唐からこのかた古典時代の長きにわたり封印とも言えそうな情況に置かれてきた「宮體詩」を研究の俎上に載せるに當って、どうやら有効に働いている。

書名は似通っているが、問題意識は三者三様であり、それによって各書の構成も自ずと異なっている。石氏、胡氏の二書は、「宮體詩」を、女性美を主題として歌う文學の、長い一つの流れとして捉える立場で共通しており、ともに時代を追いつつその折々の「宮體詩」に目を通し、内容・スタイルの變化を追う方法がとられている。これに對して、歸氏の書は、主要な關心を梁代「宮體」期の詩に絞り、そこへ流れ込んだ複數の要因の總合として「宮體」詩を解剖する方法をとっている。以下に、各書の概要を見ていきたい。

一 石觀海『宮體詩派研究』

本書は、武漢大學人文社會科學文庫、陳文新主編「中國古代文學流派研究叢書」の一つに當たる。シリーズの方針を汲んでもいるのだろう、宮體詩を流、派として捉える立場が窺われる論述となっている。「宮體詩」の掩う範圍を幅広く考え、梁陳の「宮體」詩をその流れの一角として組み込んでいる。章立ては、次の通りである。

第一章 宮體詩派的文學傳承

第二章 宮體詩派崛起的歷史必然

第三章 發軔期的宮體詩派

第四章 發展期的宮體詩派

第五章 全盛期的宮體詩派

第六章 衰頹期的宮體詩派

第七章 宮體詩的藝術貢獻與審美價值

餘論

主要參考書目

石氏は、劉師培の説（前掲）に觸れたうえで、「宮體詩」は梁陳詩壇限りの孤立した現象でもなければ、皇太子の宮廷内だけで盛行した特有の詩のスタイルでもなく、南朝人士の一種の思潮を背景として現れたものであるから、梁陳の「宮體」の枠を超えて、當時の文化、氣風と關係づけて見るべきだ（六一―六二頁）、とする。六朝より時代を遡って『詩經』『楚辭』から参照するのは三書に共通することだが、下って唐代は晩唐、さらに藝術的影響として詞の世界との通底にまで踏み込んでいる（二九七―三〇八頁）のに

は、著者石氏の關心の在り處を見ることが出来る。

視野に入れる時代の範圍・ジャンルの幅廣さとともに、作品を取り扱うのに多くの紙幅を割くのも、本書の特長である。第三章から第六章まで、劉宋の大明・泰始期を「發軔期」として以下、齊の永明期（發展期）、梁代（全盛期）、陳代（衰頹期）と「宮體詩」派作品の變遷を辿る検討は二百頁にのほる（九六―二九五頁）。検討は、主として作者ごとにその「宮體詩」に目を通す、という形式で行われている。代わりに、「宮體詩」と「宮體」詩の境界、「宮體」詩盛行の背景となつた文學理論、等々をめぐる細かな議論の検討には深く立ち入っていない。胡氏・歸氏兩書ではともに章を立てて扱う『玉臺新詠』の成立事情や理論的關連についても、特別な項目を立てず、徐陵の作品を検討する中で、徐陵が宮體詩派において成した貢獻として觸れる（二六七―二六八頁）程度である。

本書で頻繁に見かけるのは「艷歌」という語である。著者は、楚の民歌に起源する「艷歌」の系譜として、樂府「艷歌行」なども擧げながら、「宮體詩」に備わる音樂性

書 評

に着目する（五七頁）。第二章で、「宮體」詩盛行の要因として第一に、吳聲、西曲すなわち民歌の影響を詳細にとり上げる（七二―八〇頁）のも、その一環である。第三章から第六章にかけて具體的に作品分析を行う中でも、樂府系の作品の扱いが、他の二書に比べて詳細である。第七章「宮體詩の貢獻」の検討において、「吟詠情性」の流れを詞に結びつけて言及するなど、著者の關心は一貫している。もう一つ、「美人」を主題とする作品への着目が、本書の基本となつている。第一章「宮體詩派的文學傳承」は、四〇頁近くを、この「美人」をめぐる文學の系譜を辿るのに費やしている。そこに引用されるのは、『詩經』周南「關雎」から、『楚辭』、宋玉「登徒子好色賦」、曹植「洛神賦」等、「宮體詩」の題材の源泉として既に知られた内容であり、これらを取りあげること自體は、先行研究を著者の持論に即してまとめたということであるが、これを第一章とするのは、本書の力點である表れであらう。

二 胡大雷『宮體詩研究』

胡大雷氏は、既に『中古文學集團』（一九九六年、廣西師範大學出版社）、『文選詩研究』（二〇〇〇年、廣西師範大學出版社）、『詩人文體批評』（二〇〇一年、人民文學出版社）といった專著で知られる研究者であり、そのプロフィールをここに改めて紹介するまでも無いであろう。この『宮體詩研究』を著すに当たったの方針と關心は、「前言」に非常に明確に示されている。すなわち、この研究は、「宮體詩」についての狹隘な定義づけの議論、理論的アプローチに風穴を開け、その興起、形成、發展、盛行、衰落の變遷過程を明らかにし、最も盛んになった梁代の批評理論がどのように「宮體」詩流行を支える基盤になったかを明らかにするものである。兼ねて、嚴密には「宮體詩」研究から外れてしまいが、と斷ったうえで、「宮體詩」を最も特徴づける題材として關係のある、女性及び女性の生活内容を模寫する詩賦の系譜について検討する（三―四頁）。こうした方針のもとに書かれた本書の章立ては次の通りである。

前言

- 第一章 『詩經・國風』の男女「各言其情」
- 第二章 「楚辭」女性形象の兩種意義指向
- 第三章 從漢代政策與觀念看漢樂府民歌女性形象
- 第四章 從漢末「交遊」士風看「古詩」女性形象知音化
- 第五章 魏晉詩歌對女性生活的描摸
- 第六章 中古賦作的女性描摸及與詩的導向發展
- 第七章 南朝宮體詩的歷程及其創作動力
- 第八章 宮體詩的文體特點——兼論與南朝樂府的異同
- 第九章 宮體詩的敘寫重心
- 第十章 宮體詩的抒情特點——誘惑
- 第十一章 宮體詩的風格特徵——纖巧機麗
- 第十二章 宮體詩中的前代女性形象
- 第十三章 唯美批評傾向中的宮體詩理論
- 第十四章 梁陳文學集團與宮體詩創作
- 第十五章 宮體詩的結集——『玉臺新詠』等書
- 第十六章 宮體詩與北朝詩歌——注重典故與場面化敘寫的北朝描摸女性之作

第十七章 唐初宮體詩的新變

結 語

これに「宮體詩研究總述」「主要參考文獻」「玉臺新詠選註」の三件が附録される。著者自ら區分けするところによれば、第一―第六章は、宮體詩形成以前の文學作品における女性及び女性の生活情況の描寫の檢討、第七―十二章（約百頁）は、宮體詩本體の研究、十三―十五章は、文學理論が宮體詩盛行に及ぼした影響、十六、十七章が、變形繼承の檢討、という四部の構成である（前言「四頁」）。

最初の第一―第六章は、第七章以下における檢討の軸を準備するものでもある。「宮體詩」作品を具體的に取り扱う中でも、「女性と艷情」を題材とする文學を見る、という關心が隨處に働いている。作品檢討の最後に置かれた第十二章が「宮體詩中的前代女性形象」についての論述であるのもその一端である。とりあげる作品については、「前言」の通り、「宮體詩」の變遷の過程ということには留意しながらも、「宮體詩」の時期の上限下限や區分の議論にはあまり拘らず、劉宋から陳まで幅をもつて扱っている

（第七章「南朝宮體詩的歷程與其創作動力」）。

特に梁陳の「宮體」に絞らず、女性美を表現する文學を一望するという一つのテーマを持って時代ごとに作品を追う方針は、石氏と似ているが、石氏が、宮體詩の作り手たちの文學思想や背景との關係づけにあまり立ち入らないのに對して、胡氏は宮體詩の美的表現追求の背景として文學理論との關連について考察を示し、淵源論も行う。こうした基本的檢證の段階を踏むところは、次にとりあげる歸氏書と共通している。

なお、本書「前言」に、徐玉如「宮體詩研究的現狀與反思」（《江海學刊》二〇〇一年第四期）から次の一節を引用している。

——總觀近20年宮體詩的研究、從宏觀上探討的多、從微觀上分析的少、具體到作品的分析則更少、這也許是值得彌補的一個缺陷吧。

「作品分析にもとづいた宮體詩研究が少ない」という徐氏の指摘に共感される方は多からう。胡氏も、この一文に同意を示し、本書の著述に努められたのであるが、卷末の附

録「宮體詩研究總述」では、胡氏自身によつて中國における近來の宮體詩研究を見渡した概論が示されていて、歸氏書の「二十世紀宮體詩研究述略」（下記、第十章）と併せ、参考になる。

三 歸青「南朝宮體詩研究」

本書は、曹旭主編「六朝文學研究叢書」の一。卷頭には主編の曹旭氏が序に代えて「論宮體詩」と題する一文を寄せておられる。自身、「論宮體詩的審美意識新變」（一九八八年）等の論著がある曹氏によるだけに、この序も簡潔で要所を押さえた「宮體詩」概説として、本書の重要な一部分を成している。この曹氏「代序」末尾及び本書「後記」によると、著者の歸青氏は、一九八〇年代に復旦大學王運熙教授のもとで修士論文「蕭綱詩歌研究」をまとめられた。當時、博士課程専攻として在籍した曹旭氏との學縁から、その後、曹旭氏が勤めておられる上海師範大學で博士課程を修め、「宮體詩」に關する研究をいっそう深められた。その博士論文に、さらに手を加え改めたものが本書である、

と言う。

標題こそ「南朝宮體詩」と時代に幅を持たせている本書であるが、「宮體詩」にはそれが詩歌としての生命を保っていた時期がある、として、晉安王蕭綱が皇太子となつて東宮に入った梁中大通三年より少し早い時期から、初唐までの期間の「宮體」詩を「歴史的なもの」とする（二二頁）。廣く「宮體詩」と呼ばれる作品の中でも、艷詩とそれが發展した「宮體」詩との境界を強く意識して、その境界を説明しようとしている。

全體の構成は、「宮體」及び「宮體詩」をめぐる諸問題、諸事情を多角的に掘り下げる幾つかの章から成る。章立ては次の通りである。

導言 中古詩風與宮體

第一章 宮體界説論

第二章 宮體背景論

第三章 宮體詩學觀

第四章 宮體淵源論

第五章 宮體特質論（上）

第六章 ヌ (下)

第七章 宮體價值論

第八章 宮體分期論

第九章 『玉臺新詠』與宮體詩

第十章 二十世紀宮體詩研究述略

これに、資料篇とも言える附録が六件、「蕭綱年譜簡編」「蕭綱佚詩補輯」「蕭綱僚屬考」「自贖」説質疑」「齊梁陳艷詩篇目」「二十世紀宮體詩研究論著要目」の順で排されている。

かなり章立ては多いが、概ね三部にまとめることができる。すなわち、第一章から第五章まで、まずは「宮體」の名稱の涵義を確認し、「宮體」の社會的背景、思想的背景、美學的背景(以上第二章)、文學思想・理論との關係(第三章)、既成の文學スタイルからの影響(第四章)、と「宮體」詩形成の前提となる諸情況についての整理・検討が示される。それに續く、約百頁にわたる第五・第六章「特質論」は、おそらく本書のメインを成す。この章で、具體的に作品に即した分析を展開し、そのうえで、第七章以下、

書 評

價值批評、時期區分、最重要文獻である『玉臺新詠』との關係を考察する手順を踏んでいる。「宮體詩」に繋がる歴史的要素も、「宮體」期の同時代の諸要因も、その時間的先後を廢して、等しく「宮體」詩の實態檢證の材料として提示する方法である。こうした構成上の特徴は、おそらく本書が、「宮體」詩と所謂「宮體詩」の別を曖昧なままにせず、明確に分ける立場で展開されていることと無縁ではないだろう。以下、本書に論述されている内容について、三つのポイントに分ち、前掲二書等との比較も交えつつ、見ていくことにしたい。

(一) 宮體詩と艷詩の區界、淵源論

第一章「宮體界説論」は、宮體詩の定義をめぐって、中國における在來の諸説を整理しつつ確認の作業を行っている。この章以降に行われる検討の前提ともなる章である。歸氏の議論を要約すると、「宮體詩」は、題材の面で見ると一種の艷詩である(「内涵的確定」)・「艷詩性質」が、形式・風格において見ると、艷詩の中でも所謂「新變」の特

徴を備えた艷詩である（「内涵的確定（二）…新變特徵」）。さらに、齊永明期の艷詩と梁代「宮體」詩とを分かつのは、體物描寫であり（「内涵的確定（三）…體物特性」）、「宮體」の體物の特性には、題材・形體描寫を主とするパターンと、閨怨・女性の情感の描寫を主とするパターンがある（「二九・三三頁」とする。また、「宮體詩」を、文人による詩である（「三四頁」とする著者は、樂府、民歌は、艷情を歌っているが、新變體の艷詩の特性を具えていない。文人の擬樂府（謝朓や王融詩の類）は、抒情詩であるが、詠物の詩ではない。……等々、「宮體詩」から、それらを排除する理由を説明するために、詳細な考察が展開されているのを見ると、「宮體詩」に關する基本的な性格を細かに腑分けする作業は、難儀であることを改めて認識させられる。そもそも「宮體詩」には、多様な要素が吸収されていることは、石氏、胡氏も網羅する通りであり、本書によつても明らかにされている。類縁關係のあるスタイルとの境界が曖昧になるのは或る程度必然とも言えるのではないか。敢えて嚴密な分別を試みた本書著者の勞が推し測られる。

第三章「詩學觀」では、「宮體」を唱導した梁の簡文帝、元帝をはじめとする、作り手たちの文學觀を傳える諸文獻をもとに、彼らの詩文についての理念を五項目に分けて検討している。まず、彼らが、詩歌の本質を『詩經』大序の「吟詠情性」にあり、と認識していたとして、「情」「性」の意味について考察をし（「詩歌本質論」）、次いで、創作に關する主張、詩歌の效用、風格、地位に關する主張の内容について考察を行なっている。美的感覺の享受に供する效用を重視するのは、南朝詩學に普遍的にみられる考え方である（「七四頁」とするなど、「宮體詩」を、南朝詩全體の流れの中で捉える著者の姿勢も窺われる。

第四章「宮體淵源論」では、「宮體」詩が影響を受けた詩文の形態として、詠物詩、樂府詩、辭賦、そして屈原から建安、兩晉、劉宋までの艷詩（「文人艷詩」）の四つの項目を立てている。うち、例えば、辭賦からの影響としては、詠物の手法と、宋玉「登徒子好色賦」以下の所謂「情」の賦、「哀怨」の賦の系譜における女性の情感描寫との二點に目を向ける。これは、胡氏書に、同じく「辭賦」の宮體

詩への影響を述べる章（第六章）があるが、そこでは専ら女性の情感描寫の方面での影響が目されるだけであるのや、石氏書が、永明體における詠物の手法を検討する節で詠物の賦からの影響に觸れる（二三二―二三三頁）のと比べて、「宮體」詩の「淵源」の整理として、より適切に見える。なお、「文人艷詩」の影響は、第一章「區界說」でも充分に言及されたことであるし、場合によつては「宮體詩」と見なされることもあるものであることを考えれば、本章でまた一項目として論じるのには、些か煩雜な印象を覺えないでもない。

（二）「宮體」期作品の検討

第五章・第六章「宮體特質論（上）・同（下）」で、具體的に作品をもとに「宮體」詩の諸特質の解明が行われる。

ここで検討材料となる作品は、主に「宮體」期のものである。艷詩とされていても、「宮體」以前に屬すると著者が見なす作品（例えば沈約など）の参照は、最低限に抑えられているようである。「宮體」期に對象が絞られているぶん、

さまざまな角度からの作品分析が行われており、充實したものとなっている。（上）では「觀賞性（玩賞、體物、輕艷の成因）」を、（下）では「新變（人物形象描寫、對偶、聲律、用典、語言風格）」を述づける。各検討のうちでも、特に（下）で行われている、對偶、聲律などの分析は、詩史における韻律の雕琢の方面では夙に關心を寄せられる「宮體」詩であるだけに、參考に價する。もちろん、數値で示された比率の類は、實はデータの根據（對象とする作品）に搖れがあるわけで、あくまでも參考にとどまる。やむを得ないことだろう。

なお、「宮體」期の同題での競作について、その制約がどのようなものであるかを検討した例としては、前掲森野氏書の第三章第二節「詩の制作に加えられた制約」に、「内容についての制約」として「和——」「同——」「侍宴、賦得——」「詠——、應詔（令・敎）」、「形式についての制約」として句數、韻が、さらに「制作方法についての制約」、「その他の制約」と、細かく整理されたものがある。本書の場合は、森野氏書に「制約」という枠組みでとり上

げられている「奉和」「賦得」「應令」などの、場を同じくしての競作、という關心はあまり拂われていない。章題通りに「宮體」期の作品の特徴を明らかにすることに専念している。しかし、周知の通り、「宮體」作品には、各詩人が個人の發意で作ったというよりは、宮廷を中心に「場」に即して營まれたもの、という特徴がある。このことを顧慮するならば、各題の作品群が作られた場ごとに検討を試みるという作業によって、詩人ごとに散らしての檢證からは見えないような、このスタイルの實態に迫ることも可能になるのではないか。「宮體」詩には類型的作品が多い、ということも言われるが、その類型性の解明にもつながるだろう。本書に限らず、前の二書にも、この方面への目配りが窺われないのは、惜しまれる。

(三) 傳統的に負の評価を招いた原因を検討することは必要か

第七章「宮體價值論」は、同意できる部分と、考えさせられる部分とが混在する。第二節「宮體詩的審美機制」において、「宮體詩」作品に見られる美的表現の追求は、文

學史のうえで功績が大きく、また、傳統的な禮教を重んじる立場から制約を受けやすい女性美の表現を堂々と開花させたことにおいて評價できる、とする(二五七頁)。大方の異論の無いところであろう。

一方、「宮體」詩に備わる思想的傾向として「享樂追求」、「男權意識」、「女性への同情」の三點を挙げ(第一節)、例えば、「享樂追求」的な傾向が「宮體詩の退廢的色彩を生んでいる原因の一つ」であり、「この方面から見ると、宮體詩の内容は深くない」(二四七頁)と結ぶ。また、第三節では、「缺陷」を三點指摘し、その原因について考察をしている。曰く、眞情が希薄であり(情的淡化)、詩の作り手の個性が希薄であり(個人風格の淡化)、内容が浮薄である(内容的浮淺)。これら三大缺點について、それぞれ、眞情が希薄なのは、「宮體詩」の必然とし、個性が希薄になる原因は、美的追求のゆえとし、浮薄となる原因は、作り手たちが生活體驗に乏しいゆえとし、そのため作品中の「眞情實感」が缺けてしまったのだ、と述べる(二七五頁)。公平を期されたのかも知れないが、果たして一連の考察は、

本研究において必要だろうか。ここで挙げられた「缺陷」は、どれも傳統的に「宮體詩」に向けられた負の評価を覆すどころか、それらを追認するもののように映る。第六章まで綿密に、「宮體詩」が確かな底流を受けて成立し盛行したという事實を検證し、著者自身、「獨特の美がある」(二六七頁)ことを確認してきた本書である。その作業は、何のために行われたのか。「宮體詩」についてその實像を提示する任務において、一律にどの文學にも「眞情」や「個性の發露」が備わるというような前提に立つ、一種の固定した基準につき合うことは必要なのか、疑問である。

因みに、本書においてこの章の果たす役割は、石氏書における第七章「宮體詩的藝術貢獻與審美價值」、胡氏書における第十三章「唯美批評傾向中的宮體詩理論」に似ると思われる。石氏書では、宮體詩の達成した表現上の特質を、唐宋へと繼承されてゆく展望につないでおり、胡氏書においては、「唯美批評」の傾向の中で検討している(第三節で「宮體詩人がどのように社會責任を擔ったか(宮體詩人怎樣承擔社會責任)」という問題設定をしている點だけは、疑問が残る)。

それらの適不適は別として、著者が自ら論述を積み上げ解明してきた「宮體詩」の實像について、それを長らく負の存在として文學史上に位置づけてきたのと同じ枠組みでの批評に立ち入らない姿勢は、評價できる。

以上、大變粗雑ながら三書のあらましを見てきた。各書それぞれの問題意識、構成には数々の微妙な差異があり、一口に「宮體詩研究」と言っても、切り口によってそこに見えてくる姿も異なってくるようだ。しかし、それはぶれとか不安定ということではなく、むしろ「宮體」というスタイルの中に吸収された文學世界の豊かさによるものと受けとめるべきなのかも知れない。切り口こそ違え、いずれの書においても共通して、『詩經』『楚辭』から六朝まで、つまり唐に先立つ時代の文學の堆積の中から、「宮體」に結びつく諸要因を掘いあげ、どう結びつくかを整理する作業が行われている。その作業によって、「宮體詩」の源に横たわる文學、文化の流れの存在、士大夫にそれを喜ぶ「性情」がある事實がはっきりと浮かび上がってくるし、

ひいてはそれが「宮體」への然るべき評價の根據ともなるだろう。「宮體」研究が、中國古典文學をより幅廣く豊かなものとして把握するために不可缺の重要な分野であることを、この三書はそれぞれの方法で示している。むしろ「宮體」期における作品とその場の實態をはじめ、検討が充分とは思われない部分はまだ残されているが、今後の研究の中で解決されてゆくことが期待される。

註

「宮體詩」の語は、文中に掲げる劉師培の説をはじめ、これを用いる研究者によって、場面によって、その指す中身にだいぶばらつきがあることは、夙に興膳宏「艷詩の形成と沈約」に「「宮體詩」ということは存外無造作に用いられるくらいがあるようだが、その實態はたしてどうだったか」（『亂世を生きた詩人たち——六朝詩人論——』四五九頁、研文出版、二〇〇一年）と指摘されている。同論考においては、梁大同以降に「宮體」の名稱が起つて以降の艷詩を「宮體期艷詩」と呼んでおられる。しかし、これが諸家の所謂「宮體詩」に代替できるとは今のところ言い切れない。本書評では、とりあげる著作のタイトルに共通して「宮體詩」とあることに配慮して、便宜、幅廣い意味合いと見られる「宮體詩」は「」付きで表示し、

「宮體」期の作品を指す場合には「宮體」或いは「宮體」詩と稱することとする。

（石觀海『宮體詩派研究』武漢大學出版社 二〇〇三年八月三五七頁）

（胡大雷『宮體詩研究』商務印書館 二〇〇四年十一月 四〇〇頁）

（歸青『南朝宮體詩研究』上海古籍出版社 二〇〇六年七月四五〇頁）